里見八犬傳 拾三編 卷廿四

へ13
709
72

遠へ門 13
號 709
卷 72

曲亭馬琴著

八犬傳

第十三輯

東京名山閣版

明治三六年十月九日購求

八犬傳第九輯下套下引

余性也僻常非同好知音不交也是从微軀生於江門而交遊罕于江門唯遠方有二三子在所謂和歌山篠齋南海默老松阪桂隠名久足是已約這個三才子毎見余戯墨諸編相喜評定寄之于余叺問當否為娛樂故郵書来往不為遠千里譬如鷲去雁来春秋不霊今茲逮本傳結局三才子逆聞之或詩或詞各詠所其長祝頌是書有始有終句句皆金玉不但增拙著之光耳褒賞幾過分矣雖慚愧不知所閣然不可藏秘箧且為蟬窠也即便附載於此以代小序云時戊戌端月　蓑笠漁隠

頃者聞本傳垂團圓寔可羨稱也因題短韻一律以寄于著作堂梧下　　黙老半漁

發研新史褒稱周都鄙競需俟速郵繡口錦心優水滸狗譚貓話壓西遊毫鋒靡敵芳流閣文焰摩空圓塚丘騷客雅人比拱璧珍篇何復有朋傳

里見八犬傳を読る長歌　　小津久足

葦北海杉の志ほに吹きまる人に物語を海苔ほすあまの志ほに焚く藻の文の苑詞をやしうまうにあるもゆ山茸いるかれのめとふ志らふ毎つらを此里見朝くるに義笠きつゝ

海さちも杉の山ちももとめきて物語あるみのうちみのうちに物語をあくまで世に伝へ名を人まの新しきを家の名のあらしたてまつるみなもとの生れ出るを世みほにたつるまきに人あまたいかさまに人を人みやもたもめかれもおもしろくいとをかしく中みなもとの国にいみくにまうとしてきたりしまかのえほる里見のあるを家もあれハの犬とふ氏人のつくらるるいかなるめもなて天の六由とらも物語をもて手のはるに言葉のあるの初きあるを

梓にゑりしなきハ清く以へる思ひハあれともつらみおのいやしさ
清きにおのかなれとも是につゝきまちぬらえたるふみの石のよ
ぬるそれかしに申合て傳ふにあらねとまなひいはまくの筆也
傳ふ業もおもしろくし以て文園に名をは園に以めしく由来名
也之てりしの星みちたるを松もさえる様のわらし衣を思ふまし哥わ
也まとの國にありしく申せ名も亡ら久五十まり四筋の絲か
おもむ以傳ししけれおのかちき様なるふいと志かんおもれふ子みよ
あるそいかるへき世よ哉なりつる人らハ古きふみの名におふ犬の
忠内を備ゆる事とらん所にいも此もさしく家人西

歩つる此しくいかけきをきはなりしを時のあはれ作りて
舎山よろ此詠ける種おほかる犬の跡以や清くし世の中のさまさめや

反歌

唐錦大和のまき哉松にまきてあやは織りなれしつゝる書も
骨をかくへるあらうえを見らむ鳥哉見む馬世し犬を申しまれてら母

八犬傳跋文をよみてよめる長歌并にみしか哥

篠齋野叟

事終りて文藻の林に流ふる詠る文のかな紀萬葉かくなと見える
漢傳漁翁且暮
このかの世に在る此苗みの海あさる婦乃翁等かにか常に在る紀のふね

うき(浮)世ゑの筆の鉤手にて海の錦をあやなすさとの年月に
取り天あまた(数多)の出す珍しく言の葉物語かきあつめ
絵あるとも見るべく世にもとめし半空なる蜃楼のかげの
海の市にかしこき(奇)かたりし丘なる妙にて書き文の巧み美しき
あるやうに思ひを描く家の流れに文の名どもあり波路
まさしき(正道)ちかひ善さるをすすめ積もる浦の蘆離(慈)し
知るを継ぎにし忠義して行ひも有るに尽くしたる(意)ちからこそ
義を学び深くも志の川くる玉の詞の玉藻数々に
作る名のすぐれたるは猛し様にさえ見る様に

春はうらうらの丘の上に誰も待つまたく以樗の光さす
中に母とかかる強くも連る志の賀の多
安房の洲にて光り出し八川の(霊玉)たから玉西
西の(八行)八川ら文字を読み流す海の浜藻のちちれ伝
富山に根さし以の(狗子)さ犬を見けるとくらくの(武雄)たけをち
まさちら雄たかし勇ましき猛き天第一やまと
鎮守ちからに(執)とつて母のまま枝しるくて
八人やみの(伝)伝はるありつながれ緒長く巻きもれ九
伝らね(四十年)よそとせ玉まくれし数(全)全丘

[illegible]

○

蓑笠漁隱曰、斯、錄前後繇客歲到來、遲速而已。非撰擇以為伯季也。江湖繙閱、百君子其熟思之。

董齋盛義書 中習信圖

讀書自嘆

休向世間訴不平疎狂聊和稽
人情淡泉未了書中語知
浮名過世生 蓑笠漁隱興継稿

蓑笠漁隱又曰、是詩、故兒弱冠、時所偶作、曩攜遺篋而得之、雖題詠非士之事、然其要似夙知吾意裏、而有斯志、因錄備遺忘、蓋彼之短命、不見是書、結局而逝、不得無遺憾也。 盛義

南總里見八犬傳第九輯下帙之下甲號五卷目錄

巻第二十四

第百二十六回　政元弄權分正副使　犬江臨別借忠良僕

第百二十七回　能辯講軍記薦餅　窮鳥還舊巢巧轉

巻第二十五

第百二十八回　士卒矛盾防自家　餅書因教告秘密

第百二十九回　五條頭代四郎啓宿憂　擊劍場親兵衛見武藝　犬江仁名揚華夏　左京兆恩厚東臣

巻第二十六

第百四十一回　惡報失明夜事懺悔　神助因妒反成寘罰

巻第二十七

第百四十二回　誣兩滅辰巳貽誑簡　尋故事政元疑名畫

第百四十三回　點虎眼巽風鬧公文廳　數衆口京兆誅祿齋屋

巻第二十八

第百四十四回　犬江前諸請關符　澄月一謀殲五虎

第百四十五回　獻五頭衆奸卒喪數頭　櫃脚小惡師徒斷手足

八犬傳第九輯下帙之下甲號目錄終　又乙號目錄別出於第二十九巻首

但馬一郎高宗
小森
田税力助
逸友
畑内雑魚太郎
貞任
鍛冶子
再太郎
大刀はとはたらみろ
ともはいとさかすく
打のそをとあきる物
あり
羊岡人

文溪堂蔵

管領政元
奇貨忘神祐
諫閉禁使臣
欲譴蛇足過
驚虎魄傷人
題政元
及巽風
同
深窗
猶有
破隙
雪吹小姐
直塚紀天
竹林巽風

文溪堂蔵

山内頭定
足利成氏
冒助友

赤壁阿瞞勢勿負
燒彈艨艦有周郎
題坂東四將
四大夫
扇谷定正
千葉介自胤
横堀在村
大石憲重
長尾景春

里見後の八犬士の門中五の君濱路
姫の端像は既に前輯に出されし今略之

女二君静琴
姫ぎくのきみ

女三君城之戸
姫あのきみ

姫小まつ
むさしの国八ヶ
のむらに雅の

女七君小波
姫なつのきみ

女六君菜
姫ちくのきみ

あふそうてねの
月をあらむ
賴鳥齋

女四君行野
姫あのきみ

女三君鄙木
姫えんのきみ

女八君弟
姫いろとのきみ

本傳出像の人物ハ面貌の老ると弱くなると本文ハ合ざるあり。看官疑ひ思ふべけれ。聊爰ハ論辨を辟ず。金碗大輔孝徳入道、大法師ハ嘉吉元年辛酉の秋、父孝吉の自殺の時彼身ハ甫の五歳ゝ徒而長禄二年ハ至て伏姫富山ゝ支あり。日孝徳死刑ゝ宥められ祝髪行脚の僧ハ成りしハ乃二十二歳の時。是その年紀ハ第十五回ハ厥く作者の自注あり。今これをもて僕れば文明十年戊戌の夏、大ハ行徳なる古那屋ゝ信乃時ハ十九歳現ハ時ハ二十歳。小文吾時ハ二十歳親兵衛初名い真平。時ハ四歳。そもゝ邂逅あける時、大ゝ四十二歳ハ成りし。これ是より又六稔を歴て文明十五年癸卯の夏、大ゝ宿望成就の日ハ犬士ゝ相伴ふて安房ゝ帰らるゝハけゝ年四十七の時ゝ五十ゝ至るまゝ本文ハ其の折ゝ年紀を具ハ誌さゞるも倉より推考ゝ看官紛れなくもあるべし。第七十三回ゝ甲斐の指月院の段前柳川重信画。よりて吾如意なる処ゝ大の面貌翁備て六旬許の老僧ハ仏ゝ後ハこれを画く者其ゝ赤本ハ世ざるもなけれ。弥老て相應しかるゝ又蜜崎照文ハ長禄元年ハその父糟武ゝ富山川ハ溺死ス時ハ彼名を出さゞるも必是少年なるべし。是より二十二年を歴て文明十年戊戌の夏照文ハ徳を出世の時齢ハ三十有餘ゝ、大ゝハ弟なるハ是よりの後光陰ハ才ハ六稔の程なるハ出像の面貌翁髭て五十あまりの人を見るゝ又犬士の内中犬田小文吾ハ髪歳より角帋を嗜て大漢なるゝ本文ハ粗見えたるハ出像ハ凡庸なるゝ。自餘の犬士ハ殊ゝ人を驚ゝ惟ハ第六輯の画工英泉のこゝの意ゝ出たりけん第五十八回ハ小文吾ハ市河ゝ依仏夫婦ハ再會の段の出像ゝハ全身肥満の大漢ハ画ハ看官ハ前々なる出像ハ眼熟れて如ゝ過ぎ只隱るゝ過ぎとハ子ゝの管領ハ享徳年間よりて鎌倉ハ時の人相稱ゝ扇谷殿と呼けり。かくて定正鎌倉ゝ退くの後明應二年十月五日ゝ卒りぬ享年五十二歳事実ハ錄倉管領九代記ハ詳ゝ因て定正卒去の年明應二年甲寅より。溯數れば本傳第九十二回文明十五癸卯の年道節信乃ゝ復雠ハ定正四十二歳の時ゝ然るゝこの段の出像ハ。

定番面貌最弱ろ。吾一知音の細評ふその弱ろ所と疑て云云と問れよりあり。但その差錯のこゝろ〻も人は誂へてのあれば不如意るるヨヲれども就中今論つらふ人々は本傳中る有名ゆえ。殊ふ尤紀者ゑれば見巧者るるは疑へて其をも作者の衍ゑるとゑるべし。然りけれども人はうちそふよりも其歟より面貌の老るあり弱へもあれば只管ふ年歳と數てその面貌の合ざると訂べ反て理評ふるゝむ況本傳は画工一筆ふあるゆ各作者の画稿ふ據て潤色して巻言と取まく欲へと。

○婢妾まで画くふ美人ゆ〻ゆ画工と作者の用心の同じから反と知るふ足らむ欲畢竟遊戯三昧る。出像は婦幼の與ふして和漢稗史の花ゑれども是ある故ふ作者の趣向を知るを以ゝ世む花を愛るは実を思ゆゆ実と嗜るは花と也も親るあり誠ふ好へて善讀者は必文を先ふして。後は出像と親るとふ画ふ縁りて事の趣と夙く悟れば讀見る時ふ興薄くむと數べ現看官も用心あり。有ゆ中ゆ徒る知音は世ふ又まゝ〻易くねば漫ふ戯房とち開て出像の上まで自評あり人の疑難と解くゝ〻本傳結局大団圓ゑ送憾ゆゝむ為りか。

○出像の差錯は猶許せべ。本文ふ至ては看官訝り思ふ誤寫まゝ〻ゑ既ふ前板第九輯下帙の中の五巻ふ校閲老眼ふ届ゆて見送ゝる。発販ふ後ふ再校ゑれば○十九の巻九行　六丁左　ふ上帙の自序の内作者暗記の失と訂て野中狼之介又野中当ふ云云とある野中ふゆる山中の誤ふく其実は品河と山中野中共ふ品河と作るべ。」同巻　十四丁右　念佛の念字上の一缺ゝ〻○二十の巻　十三丁左　長城生の隊ふ云云とある長城は誤と当ふ根生野ふ作るべ。」同巻　廿六丁右　四行　□　影職影は顕の誤字と同巻　廿六丁左　九行　箕とてその傍訓そはゝの誤刀と当ふみふ作るべ。」同巻　九丁右　勇猛精進ゑの下の傍訓ゝ〻ゝ。□　□　ゝゝと当ふゝゝふ作るべ。」同巻　十丁左　初行　刃心函誤寫と函当ふ函ふ作るべ。」同巻　廿三丁左　七行　□　壯介当ふ莊介ふ作るべ。」同巻　廿七丁左　八行　中條弟兄とある中は誤寫と中條当ふ十條ふ作るべ。○二十二の巻　三丁左　四行　長挾介の挾は狹の誤寫と」の下　□　□　銭は銭の誤刀と」同巻　十二丁左　五行　君所ゑの傍訓誤寫とみゝちふ作るべ。」同巻　九丁左　五行　百會ゑの傍訓誤刀と当ふ

ツブリハ作るべし○二十三の巻（初丁ノ右）第百二十四回（題目）の二十の二を二の誤寫本回則百三十四回之同巻（八丁右四行）棘髭鼠魚壻元亀八の名號吾一知音の評ハ石亀屋次郎太の初名と鯛の壻源八とあるとそ是を同名として訝れり然けれども鯛と棘髭鼠魚と源と元亀と共ハ音訓ハ同くて其字ハ各異之既ハ両個の出来介ハ同名も亦作者の用意のミ知又源八元亀八現八を同名ハあらぬ水滸傳る張青と張清の如しされ同號紛れ易るべければ後ハ棘髭鼠魚壻の壻と改く骨とも知音の評ハ従へし」同巻（廿五丁左二行）禀上の上の上ハ上の缺るるり」同巻（廿四丁右初行）舞雲崔の歌ハ一やその都ハ雅遠の云云是を富永とせハ異説ハ紛まる作者暗記の失へ其の歌應仁記ハ據まバ飯尾彦六左衛門（名ハ常房）の歌ハ上の五文字汝や知るとあるハ亦知音別人の評ハ心つけらまゝれば躰く刊行の書肆ハ誂て重く補刻ハ遂れども既ハ數百部揭出ハ後れば今又ハ大槩を舉ぐ訂ハ漏ハ猶ハ有べし。

終

南總里見八犬傳第九輯巻三十四

東都　曲亭主人編次

第百千六回　政元權を弄びて正副使を分ツ　犬江別ハ臨く忠良僕を借る

復説犬江親兵衛ハ蜜崎照文と共伴ハ京師の公務を果ハ身の暇を賜らんとそ。管領政元の邸ハ詣ハ政元即便家の家臣香西須賀六をして伝ハ遠路の使その甲斐ありて首尾殘る所なを両邸所（室町大義ハ思召さる）歸國の暇とられ禀ハ情願ハ尚ハ示ハ上の御内意とハ明日己の時候ハ参るべ面談その期ハ親兵衛ハ是を美りて肚裏ハ思ハ其の地の公務ハ首尾宜く宣上旨並ハ御教書と既ハ遽與させハ何ぞの御内意あらむ訝ハ問ハ推て問ハ照文と共伴ハ言美と禀ハ躰て歌店ハ退て當晩姥雪代四郎ハ件の一義を

其元生るゝ代四郎も亦訝りて左ゆうん右ゆうん狹と思ひ難れば照文も心かゝる詞の沙汰推量果ざるけり。却説其詰朝親兵衛の照文と共伯ゝ代四郎以下。自他の伴當と昨の如従へ今西陣る政元の邸へ赴て伺候のよしと稟もゆゑ青侍們ゆゑ通て客房へとて案内は立程ゝ土圭の轉る音近く少そて己牌ゆゑ姑且て香西復六を親兵衛及照文ゝ對面ゝ命ゝ違ゝ伺候の時刻の早ゝ旁ゝ労ゝ却ゝ主君ゝ今朝ゝ花の御所へ出仕の留守ゝれども程ゝ退出ゝ豫吩咐られ美もゆへ甘ゝて等ゝ別室ゝ誘引て准備の酒盃ゝ薦めゝ又畫饌ゝ差ゝ青侍們給侍ゝ連ゝ佳殽珍羞の種ゝ多ゝ歎待叮寧ゝりけれ親兵衛と照文ゝ思ゝ故ゝ這盛饌ゝ賜ゝ恩ゝ舞ゝ舞恩ゝ只得ゝ儻就ゝ青侍們ゝ迭代ゝ盃ゝ薦め餚ゝ添且畫飯ゝ差ゝ程ゝ秋の日ゝ未の刻近ゝ時候鄉食饌ゝ盛ゝ果ゝ查西復六ゝ親兵衛ゝ向ひく。

主君ゝ力僅退ゝ然ゝ不娛ゝ對面ゝ仰ゝ誘ゝ安ゝ内ゝ親兵衛と照文ゝ鄉食饌ゝ賜ゝ後ゝ立ゝ引ゝ正廳ゝ赴ゝ既ゝ管領ゝ有司ゝ近習們ゝ待ゝ出ゝ儲ゝ上座ゝ在ゝ當ゝ復六拜謁ゝ東使見參ゝ政元ゝ隨即親兵衛ゝ間近ゝ招ゝ薦ゝ席ゝ與ゝ示ゝ東使の歸國ゝ抑留ゝ今日ゝ逮ぶと是私の一説ゝ人ゝ聞ゝ大江親兵衛ゝ少年ゝ武藝ゝ男力ゝ八箇國ゝ敵ゝ然ゝ角ゝ拝ゝ掛ゝ抗ゝ膂力ゝ義秀親衛ゝ兄ゝ且毅ゝ剣白打ゝ馬ゝ精妙ゝ孺兒ゝ猶優ゝ身軽ゝ那館山ゝ城ゝ降ゝ逆將甚蚤田素藤ゝ二たび疾ゝ虜ゝ功績ゝ云ゝ事ゝ出崖略ゝ昨今人ゝ風聲ゝ這里ゝ專知ゝ示ゝ當將軍家ゝ尚青年ゝ雖ゝ文武兼備ゝ盛德當家扶桑ゝ君ゝ食宵衣今事繁ゝ世ゝ攻伐軍旅ゝ博士ゝ課ゝ史傳ゝ閑講ゝ無ゝ聽ゝ召ゝ又ゝ時ゝ馬の

故実を考訂させ、笠懸大逐物と御覧あり。便是絶へると継ぎ廃れると興さすく欲あるかな。犬江が本事尚様々と人の稟を聞食て卒然ながら其親兵衛を權且這里に住在して、その餘は都て女し遣るれば我眼わろく折。必件の武芸を見むとの義と相計ひて仰合されられ沒元奉りそ相伴の御諚の趣右の如く有侍れば蛋崎十一郎は宣旨御教書を相携て東へ退去そのあと是房州義成つ相伴べし。這挙は親兵衛その身單の一期の面目のみならず里見の光と増さるわ房州父子の幸ひなんとられて親兵衛額擲る頭を抬げ席を避く。謹て稟さう御諚義のいかゞあれども、その御内意恐れるべき聞の謬ふてはいかゞ武芸は武士の家業汚れば小臣も亦人並弓の本末大刀抜く術を学ばるれども、いかゝして上ざまの憲覽に備へんや然だるの技いつむも曩に素藤征伐に微功あるとかは都人の僻傳へ虎の威を借る狐に似る僥幸なりけると好も思ふ故ふてはいかゞ実を推せば那一挙は順ずるとて逆と討つ主ぞは義成の寛仁大度の武德ぞ臣ども功かいなと辭ふと政元宜へば謙遜辞譲は然るとなれども世の風聲は左まれ右まれ里見は家臣ヨメるむは今番大事は京師使は少年わろく擇れ、その侯傑なりと問ぜて知るは足れり。然は近屬武藏守持資入道道灌が二洛をて参内の折又武の達人なるとそ詠歌あると同れまるとて。我宿は松原つゞき海近く富士の高峰を軒端ぞ見ると稟さへ叡感特は浅くも時の面目世の褒賞那身一期の栄とそ歌は搢紳の風流ぞ武士の家業はあれども人品頭はせざるは。況や和郎は武芸をとりて将軍家は御賞翫は遇なるとはその身一個は幸のみならず里見の武備を赫々たる。王従一致の名與誉あるは人の義と情思ふぞと解れて親兵衛阿容る色なくその義は是は過分なる幸でいへども小臣今番の正使ぞ宣旨御教書を賜りは更は御遊の故なるそ反て京師は抑られ副使の照文はのみ身の暇を賜ふは正使なる甲斐もなれば時の不便を争何せむ自由の至りはいでも武芸御覽を幾日とも定めさせ給ふは這回は帰國の暇を賜り使の役誼を果してそは復参りはめいで是ものあれ執成を願へくそはいとは果は改元は眼を瞋らし聲苛立て默れ親兵衛

過言之同輩暗譚の私議るゝべ已が隨るとゝもいわ将軍家の厶口命と固辞まろこい大不敬
その身一箇の罪るゝぬ義成の上るゝべ況を覚期あるゝ欲いふぞと權威と示も柵冥堰留らゝ
秋の水流れもあへず濃に淡に顔ふ丹楓い主客の勢ひ脱る路いるりけり登時香西復六ち膝を
找めつ主ふ朝ひてかるゝく稟もゆう目今親兵衛が不慮の過言ふ京師のゝ態ふ熟ざりけ田舍
児と少年ゑれいで許さぬゝ臣ゆゑ又論ゝゑゝ美仔細いと覚解て些ゝ退て却親
兵備ふうち向ひて犬江生ゝ美遅滞ふ只是千慮の一失欲いでもあるに事とゝ今番安房殿の
ゝ願ひい允されゝに筋るゝ我主君の提撕稟ゝふゝ両御所室町東山格另のゝ旨をゝく
異説るく執奏まゝくけれ日ゝぞ敕許の欲びあり和殿們君臣上下の面目世ふ得ゝに況せる
ゝあられい寡君の好意と將軍家の御洪恩るゝのゝ非如一年二箇月這地ふ留めゝ
とも固辭稟まい義ふゝぞ忠もゝあゝで自滅と招ゝ世の胡虜ふゝゝのゝ蛮嶠生甚麽
ぞゝと向れて照文然ゝい親兵衛ゝ云云と渋り稟まい職分と人ふ譲らゝと思ふ在り开も理

ふいへども台命の最も惶に教諭の外いゝぞ在下則宣旨と護なり御教書と相捧て
安房へ退て恁々と返命仕ゝび義成必欲びて美なり親兵衛ゝ奄留と疑ゝべもいゝぞ
と答く傍と見ゝて犬江生聞ゝく事既ふゝゝ逮べゝ美勿論ゝらんかと云られて親
兵備頭と抬げ然ゝ我不肖ゝ京師のゝ態と知ゝ田舍見ゝれどゝ天子將軍ゝ況を
思ふゝふゝねども人各その主の與ふぞ甚漢の蒯徹が韓信の與ふ辟言を取て跖ゝ狗吠ゝ吠る
とゝひゝい寡ふ以ゝゝ然ばゝ今只管ふ志と立まくゝれば主君の上ふ妙ゝゝ進退惟谷
ゝ枉て仰ふ従ふべゝ稟ゝゝゝ稟ゝゝゝゝゝとゝふ照文欲びて香西主親兵衛ふ既ふ美服仕ゝ
過言の罪と恩免ゝゝ在下ゝゝゝ幸ひゝゝん陪話ゝゝ復六ゝち聞て开ゝゝかゝゝ珍重々々
ゝゝゝて云ゝ膝と找めつ両ゝを衝て稟上ゝる親兵衛と云
云と鮮醒ふゝゝ他ふ正使ゝゝゝて返命と副使ふ任せとのゝと惜ふ一旦御詫ふ悖
ゝゝ後悔美服仕ゝ不敬の罪と釀ゝゝ田舍見の疎忽ぞ且少年ふゝゝ恩免ゝゝ

願しければ、勸解れば政元點頭て、命らば親兵衛先非を悔て、稟もし忌状に相違なからんや。十一郎も同意なる歟と問へば、親兵衛找を掉て、遅鈍の本性なれば、恁く御詮義のみ只あん指揮に依るべけれと応ともれバ、照文も倶に良りと面示せず。政元然てそと又點頭て、命らば復異議もなし。十一郎は歸國まで總ての事は趣を房州なる義成に傳へよかし。又親兵衛は今よりまで將軍家の召人なるに、市中の旅宿は宜しからず。明日は歇宿を我邸に徙して、異日の御沙汰を俟ちね。その義は香西復六に豫あつらへさしたれバ、退りて宜く談ずべしと宣示し、言果て扇を拿て身を起せば、近習們前後に從ふて倶に奧に赴きける。恁而香西復六は、三四個の有司と倶に親兵衛並に照文を誘引立して、客房へ退りて倶に坐を占て、今日の公裁危かりしに及て、安なる至りの賀を欽びて演ていはく、剛才寡君の仰の如く、犬江生は本邸に旅亭を宛行れば、明日は夙起て移りたまひね。然ばとて伴當を多く留んは無益に似たり。犬江生の給侍は本邸の僮僕あるなれば、不自由なからめよとある君命なれば、從來の伴當のその地に殘り住る者は、另に旅宿を賜ふべし。开も窮屈に思ひなば、初のごとく客店に逗留もともけしうはあらず。その義をこゝろ得てよかしと告るを、親兵衛うち听て、傳達の趣旨意承りぬ。我身に隨ふ伴當は若黨雜色奴隷と倶に十餘名に過ざれども、僮僕さへに隸ぬるならば、逗留の中要なき者は旅宿は他們が情願に儘すべくやはべらむと応をすれば、照文も復六にうち向ひて、執成によりて首尾好かりける歡びを演、且有司們にも一個々々に別を告て、親兵衛と共侶に退りて外面に立出れば、代四郎以下の伴當は安からず、待着て倶して歇店に還る程、晷は既に斂て下晡になりにけり。却説親兵衛と照文は、いそがしく歇店に還ると、頓て頗者居る奧なる貸坐席へ代四郎を招きよせて、鄕的に政元に傳へられたる台命の事の趣箇樣々々と告知すれば、代四郎听々眉を顰めて、开なる最不便の事なりかしとは思へども、和子の武勇の甚く、華洛にさえ聞えしは、徳孤ならず、必隣ある所以にもやはべらん。親兵衛推禁めて、否とよ。我身再世に出て、里見殿に仕まつりしは、この春よりの事なるにまで素藤征伐を除くの外、屢軍陣に敵を屠りて名を顯すことなかりしに、何人が傳稟して、

将軍家は知食けん是疑ふべきの一ッと且當將軍家は文武の德ましませば笠掛狗追物の故式さへ再興あらせて亦内もると世の風聲ふ傳へられども。幸も亦時ふ依るべきの狀近屬六角高頼ゞ叛きまゐらせて。朝參の礼絶えれば將軍みづから觀音寺の城を攻伐めんとて軍勢催促ありとふ。その義も亦都人の風聲ふ粗傳へたり。実ふ倘然るおそれ珍しげるふべきの馬の技を御覽せんとて東の使を抑留よと仰もるかのごろ。是疑ふべきの二ッと知又我旅宿を轉じて管領の邸ふ召置れ那内人と給侍よ隷て我伴當と一緒ふせまと掟らるゝ弥訝しかくの如きの敵の降人狄罪ある武士を御内人ふ預置るゝ法則ふ相似たり是疑ふべきの三ッなりけり此を思ひ彼を思ふ約莫今番の淹留凶多くして吉少かんと然は思はまやと悄語けば照文も亦聲を悄めて。咱ふも亦始より疑ざるふあらねども然まで深くは思ひ込ざりき什麼いふまでとうらんと。困て頭を病ましれば代四郎听々創く悟りて眼を睜り氣を凝らしさてもくとぞうふ又いふよりもなりけりと親兵衛微笑を慰めて。曳よ然なり思ひ屈しそ非如那説ふ所以ありて我身を抑置るとも。折を窺ひ路を披きて。後日易く安房へ還らん。蜑崎王歸國の日。両館は亦ふ義兄弟ある。大母妙真ゆも這意を示し慰めて。かくもあと言傳ゆ憑むぞよとふと照文ゆ果ぞ。斗いられぜともあらざるふ只恨らく身も共侶ふ這里ふ憂ひと分ふ由ふ宣旨御教書あると爭何いせん。和殿は萬事ふ神々ましまして知仁勇の三德あれば縱利ましまして誘ひ引るとも義ふ背く惑ひるふべく。火水は中ふ措るとも恙あるべきふ思はひども猶千金の身を愛して。一日も早く吉信を待せめと慰れば親兵衛連りふ嗟嘆して。我心は石ふあらざれば栄爵高禄甲まれも利をもて誘ふ。ありとも心ふ動ることなしと。我義兄弟七名を各々窮阨あり。折九死を出て一生を得る日までの艱難憂苦を偽ゆくだふ毛骨竦ふ咱ふは。曩ふ妙椿が妖術ふよりなん疑ひと。京で他郷へ遣される。斗も須臾の程ありて。館のあん疑ひを解け反て功名両ふ義兄弟等ふ抜萃る心の傲りあらせでとく。今帰路ふ柵柤て。又窮厄ふ遇ひゆふ狄ふ姫神の神謨りぞ。曩ふ苛子崎の水難ふ。ひとかるべき我爲

文溪堂藏

そこんと悟れば後易くなれとかくと代四郎うち笑て智者の主張然もあるべし今りとて那邸ふ逗留の程相従ふ伴當一名もあらぬそこそで胸安くぞ旦暮さえ餘人も知らぬ小可ハ那里までも隨ふべれと惴れば親兵衛頭を掉て汗も亦要るに擬勢の更那邸ふ奪るとも咱ら一処ふ直れぬと又何の益らある汗と思ふぬ後悔あらんと諭せば代四郎沈吟して然らば折々那邸へ出て安否を問ふべれとかくを親兵衛亦不ゝて曳の主意猶浅ら一緒ふ直れぬ我伴當の詣来て安否を問べと輒く對面を許されんや益ふ疑と期を推て示せ意見よ代四郎ハ困ゝて一要時默然ら浩処ふ蛍崎の伴若黨某乙が遽あく這奥坐席ふ来ぬを照文あく見て汗を某乙欤所要やあると問ハ若黨跪く否別義ハいぬぞ曩ふ苛子崎よりあん囲許へかゝ遣される紀二六が所要と果ゝ紀迹を慕ふそ目今まありあれと告るふ照文點頭てそそ亦奇特のるるゝ他ゞ今来れぞとく商量敵ふるるよゝもなゝ只両舘の御安否を伺ひ知んのそふそとかくと親兵衛咳れふ紛ら禁めて否紀蛍崎主今日紀二六が来ぬを来るハ是究竟の便宜その故ハ箇様々々徒の密説あり是ぬの計ひ好らぬそと耳ふ示せば代四郎も倶ふ額を駢ゝ聴ゝ只顧歎賞して赤ゝ一笑局ふ入る程ふ點燭時候ふるゝらば店小婢が引提来る行燈坐席ふ措居て偽繰る運ぶ々餐を三個の容ふ薦れば立まくをる若黨を照文やと喚禁めて尤ゝ遽く今己ふ口腹いそぐくるふ這ゞ飯を果ゝて紀二六ふ對面せん店小二ふ吩咐て他ゞも飯を先食さして喫果るば這里おこれ啓よろくと急せば若黨ハ果て已が歇りの外面る貸坐席へ退りける小程ふ親兵衛と照文ハ代四郎と相飯を夕餐を過ゝ囲坐して互ゝ件の密策を云云と相譚ひゝ倶ふ紀二六をもう程ふ姑且て紀二六を行装の儘拔折ふ裏を解降ゝ刀を引提げ這里ふ来て咳れるゝ内へハらむ次の間の際る敷居の邊ふ坐して刀袖達差ゝ居ぬを紀二六をひとふ照文先答て思ひよりと早かれ先両舘の御安否を伺ひまるべく且談むぞとゝもあれ啓るを這方へ找

親兵衛
機に臨く
意見を
密談も
げんらく
ころくろ

代記弟
ころ文

こねと招けば親兵衛代四郎も共侶ふ労ひて今一日他留別の折ふ荘て和郎ゞ来ねるゝ便宜
因て談まる密談もあるふ間遠くて宜しくゞ歩くと許さる紀二六ゞ戻くゝ内ふ入て代四郎ゞ
次ふ坐り照文と親兵衛ふ向ひて又額傷の聲を低めて却亦上なる姥雪主も聞召れよ
小可昼襲ふ苛子崎より来ゝ国許へ返されし折波の上ふ障りなく館の御沙汰も好首尾なり
ける始めゝ固様々ゝ終ゝ又徒らゝ然ゞて姥雪主ゝ恐ゞ術よく仰
られ折ふ始めて稲村ゝ反て奇特ふ思食ゝ因て這回も犬士達商量ゝ先老館ふ
告まるゝ悄地ふ且ゝ伺ひ申ゝ又徒らゝ計ゝ注進状の別翰ゝ稲村ゝ披露ふ及れゞ
まるゝ館ゝ姥雪主の水陸二箇所の武功ゝ殊ふ称ゝ申ゝ二三士俱ふ帰国の後宜く
御沙汰あるべゝと仰られゝ然ゞ一両日ふして那里の御要東ゝ行ゝ大士達の謝書を
届けまるゝ且小可ゝ情願ゝ箇様々々と告ゝ錦織主欽び感じて隨即主君ふ申ゝ
上げ内命より小可ゝ宿所ふ留めて便船ゝ那這と討させ折ふ尼之崎ゝ還るゝ海舶あ
まゝ開ふ載られて銭ゝ費さゝもなく亦復日毎ふ順風ゝ湊歌ゝヨヽせゞ昨日晡時の左
側ゝその船尼之崎ふ果ゝ躍て浪速ふ赴て歌措せ折ふる船の鍼師笹高工役夫
ら仰ふ宿所ゝ詣る程ふ既て日の暮れ船ふ明るゝ待て今朝風より出ゝかゝ
秋の日暮れ十二重ゝ風ゝ走り果て方僅着到仕り国許ふ両館ゝ初なり孰も
さゝ家の内毫も差障まさゝの餘の分も大士達の消息ふ安いめゝ詞せゝく来
意ゝ報て推乃ゝ仕る書翰亜より道節小文五吾ゝ回報二通ゝ出ゝ膝ゝ找めて照文と
親兵衛ふ遞與ゝ俱ふ受合て欽び特ふ浅ゝ先両侯の恩ゝ拜て且紀二六ゞ恵

東京大学総合図書館蔵

東京大学総合図書館蔵

心と或い誉或い労ひ各その書の封皮と折て燈の下に黙讀る程に側聞き代四郎い今
ぞ心の花開く感涙坐に吐むまでに身の鉉ぶに堪ざるけん席を避へ東に向て只両侯の洪
恩徳誼と俯仰ぎうち念じて拜謝に肝胆を凝し念ト果れい親兵衛い又代四郎と
身邊に召て嘆先を見ゑ我義兄弟七名の連署の回翰に載られ其事の
趣い今紀二六ぶ報ると然ばら精疎るけれども。よく見て思へ意味深ら先所ゆ
件の書翰と二ビ開て微音に讀むと代四郎倩所果て貌と更め額を衝て小可何
ぞの過世あて狡両館の御慈愛恩澤冥加に餘るのみ〳〵ぞ故王道の庇いし〳〵又
七箇の犬士達の愛顧によりてその幸あり驥尾の蒼蠅虎前の野狐兎毛だらも我徳な
らぬと思へば僥幸へけ天おそろしくひと托ると親兵衛ぞあへぞその義い獨嘆のみ〳〵咱ぞも
亦両館の慈恩愛顧と今爰に千萬言を謝しまるともいふまで盡ぬん願い念じく
幾ばくでも忘ず日ゆく報恩の時とぞろてそとゆれと論しう傍と〳〵そ喃蛮崎王今の急

務の那誠に在り快紀二六に耳に示しそのことを沒さしめるぞと心屬れい照文い然也々々と紀
二六を召ひも身邊へ召侍らして悄地に示しその地の顛末箇様々々と迷もるく鮮くと
約莫半晌許解果て又の曰管領漫に公意と借て大江を抑るのみ〳〵び旅宿と邸に
移さまるに伴當と一緒にせざれと掟らく故てそあるに今更主僕を分られてその客店に
残る者姥雪覇兵甲まれもまれ或い大江主の安否と訊ね或い市中の風聲と悄地に告まく
欲さ居とも輒く對面と允さるべくもぞ推量果まて違いぞ屏と隔て癬を搔く心焦
燥と増ものみまて事に益なを爭何いせむ有低れば我も俱に居て憂と分ち朋友の信
義をまに畫さんと素より望む所なれども然しそい宣旨と御教書と棒げて安房へ立か
へりく両館に返命を仕る日を幾日とも知ぞやるむ開も不忠ぞ臣る者の本意にあら
ねば首鼠両端に決難る事最難義の折るに沒ダ来ぬるを幸ひ因て大江主の
計ひあり沒い酒家に做代てその地に留り歇店と異に經紀児るぞに打扮て那邸に出

入せば。方便とゐ以大江主の旅宿ゐ尋ね。立入りて。那隷僕們ゐ親くるべ。王ゐ逢合もみるべくもあ然るとゐい那里の動静を。姥雪叟們ゐ報知せ。又巷談街説と。那家中の秘事とも。知るよりもあるべ。大江主ゐ密ゐ告く。後の便宜ゐ。ゐるとあるべ。西家ゐ代とぬる。和郎ゐ過ぐ。ゐ大役ゐ。よくせよかと。悄話けば。親兵衛ゐ。ゐ。紀二六和郎ゐ。東人のかへさの伴ゐ立んとそ。千里の水行を遠くとせで。今日ゐも這里ゐ来りけんを。我ゐ故とそゐの地ゐ留めて。又一役と課まるゐ。その忠誠の志を思ざるゐ似れども。ゐの議ゐ。但我上のこころぐ。第一館へ忠節ゐ。則その忠節ゐ。你ゐ東人蜑崎主の志ゐ代るとも。其主の與ゐも忠ゐ義。ゐの義を思ひ惑ひそ。因て再ゐ以るゐ。汝經紀児ゐ打扮て。那郎ゐ入ゐまくるも。人の汲引ゐ據るゐ。ねゐ門子們訝りそ。入ることゐ允さ。其頭の為ゐ。究竟の東西ゐ。曷裏ゐ調貢の金銀諸色を。浪速の浦より運送の折。香西ゐ心と屬て。非常の備ゐ。せよかとそ。遽與ゐ。那家の木牌ゐ。ゐ。紀二六異日那里ゐ。ゐ。内ゐ

入まくるゐ折。木牌を出して門子們ゐ示ゐ。ゐ障りあべくゐとゐ。傷ちて。叟ゐ。曷裏ゐ預けゐ。那牌ゐ。ゐ。出ねと。聲悄まくゐ。ゐ。代四郎ゐ。有りと。答も。果ゐ身と起ゐ。行李の内ゐ。件の木牌を出して。遽與ゐ。紀二六ゐ。受戴ゐ。懐へ。夾めて。些身と退りて。恭く。照文と。親兵衛ゐ。ゐ。向ひく。詞徐ゐ。答るゐ。寡ゐ。御賢査ゐ。毫も違ぐ。ゐ。國許の首尾宜ゐ。一日も。ゐ。告ゐ。亨ゐ。主の帰路の伴ゐ立んと思ゐ。ゐ。其ゐ。増て。両館へ忠節ゐ。代りそめせよと。仰示せ。ゐ。御教諭の言の趣惶ゐ。ゐ。恭くも。鄙語ゐ。云。瘦馬ゐ。重荷過る。今番の大役心許ゐ。猶ゐ。指揮ゐ。従ひまくゐ。ゐ。代四郎ゐ。教ひく。今ゐ。後の交加と。諜ゐ。合さんとそ。相譚ゐ。親兵衛急ゐ。喝禁めそ。叟ゐ。その義をいそぐとゐ。紀二六ゐ。今宵ゐ。別店ゐ。逗留して。我黨ゐ。人ゐ。知られぐゐ事。成らん。且經紀児ゐ。打扮ゐ。とも。木錢ゐ。何を。賣るべ。先其金と。取せんぐとゐ。紀二六ゐ。図許を

退る折館様より賜せし金のいへばその義も初ひ易くて倘亦足こぶるゆゑ姥雪
主ゆゑひとと辭ふを照文ゆゑ汝は夜の深夜間ふ去退て歇店を討めよ
倘伴當们ゞ那里へ行くと問ゞ我所要ふよりて香西許赴くと今宵は還りかねんと
いひ哄へて快ゆよと諭せば紀二六ゆゑる果て照文親兵衛及代四郎ゆも告別ふ異旦を
契りて外面投て出ゆけり是ゆよる代四郎は伴當们ゆ明日の事照文ゆの地と辭去
と親兵衛は將軍家の台命より管領邸ゆ旅宿と移せ事の由と告て准備を
せべられと推續紀ゆ伴當の雜居の貸屋へ赴くべ親兵衛も亦果せ所要ふ心
いそぐれて獨燈の下ふ立退ゆ客研をち啓く両家老東荒川へ晋達せべ呈書一通
と七個の義兄弟へ回翰又大母妙真を慰ゆ消息と共ふ都く二通と一要時の程ふ寫
果て一個々々ふ封皮と整是と照文ふ遞與ゆ蛮崎主憚りゆゑ這拙翰を
憑ゆ憑ゆ両館へ送ゆ我兄弟ゆも我上と疑ふべゆ大母ゆ女

流の胷陜くてさぞゆ苦労ふ思ゆれ又姥雪ゆ知ゆ小郎ふ掬ゆ性ふ
起ゆ折宅眷ゆふも告ざりと差ゆと今更ふ消息と寄せべゆ音音
老媼曳ゆ單節ゆ彼の意とゆゆ
ゆ對面の折ふ老婦達を慰ゆ慰めゆ
事復ゆ障身のゆ内ふ咱们ゆ早天ふ立出て浪速へ出て風待せ寢まゆ
まゆべと云ふ親兵衛再説ふ及ぶ堂連ゆ
儲ゆ云ゆ俱ふ枕ゆ就ゆ照文ゆ
ゆ親兵衛ふ隷ゆ
ゆ親兵衛初ゆ従ゆ我身ふ伴當
ゆ皆徒ふ彼ふ弥ゆ事ふ盃ゆ蛮崎主ゆ大切ゆ宣旨御教書を推乃
ゆ非常の備を堅ゆ咱们ゆ姥雪ゆ紀二六ゆの餘ゆ鎗奴鞋奴及柳笠鎧
櫃を持ゆ者甲乙五七名ゆ人足ゆ親兵を要ゆと辭ふを照文推返ゆ

も這回の伴ふ十個の騎兵を隷られ、両館の御意ゐるふ、その期ふ及びく一人ども和殿の與ふ留措ぞ、那ゐん旨ふ違ふ、それゆゑ且正使の伴當の、陛下ふ寡くゐるゐ、両館のゐん為ふ這頭の外聞宜しからぬ。今とて要ゐる騎兵ども後ふ用ゐることゐん歟是も亦知ゐらぬ。枉てその説ふ任せゆゑと詞を殷ー理を舒て騎兵五名をゐふ留め我伴當と騎兵雑色要ゐる奴隷を相従へく星斑ゐる秡明時晨ふ親兵衛代四郎と袂を分ちく浪速を投ていそぐーゐの日下晡ふ速びて暴裏ふ歇て這浦ふ在せて、舩ふ乗ることゐ泛くけり。然ば這海船ふ始よりく残される奴隷と役夫數十名住り。折ゐく順風ふ乗ければ鍼師篙工們歓び勇みて、躍く鮮纜の准備をゐく。その詰朝帆を揚く東を投く走くゐる。未迥ゐる大洋ふと平ふ海れども地上の風波定めゐく。始俱ふ来し人々抑留られて獨立ち苫屋の松も遠離り。待とく今日今一日も千年と過ぎ心地せる賜文只云云と慰難し舫逢の離合時ある愛哀苦海ふ不娯し汗涯りゐりけり。

第百三十七回　能辯軍記を講じく餅を薦む　窮鳥舊巣ふ還りく巧ふ囀ふ

却説其詰朝已牌時候ふ、犬江親兵衛主僕の住り居る客店へ管領左京大夫政元の士卒一十餘名、鞍措ゐる馬ど牽し来て、香西主の指揮ふよりて、犬江殿と迎ん為参りしと喚ばく。執接の若黨ふ有司の書翰を遞與ゐ。親兵衛是と披見て、隨即代四郎を召てふ。管領家より迎の與ふ目今士卒とおとされ、我伴當ふ要ゐれども然し我居る那里の宿所を相届けぞ、皆送慽ゐく。因て畏と若黨騎兵と五七名ふ那里まで送ゐともけーゐあるー。遮莫思ふよりもあれば鎗鎧櫃ふ持せぞ、高名の歇店ふ残し措くべ。何とゐれば敷ふ武器と推りて那里ふ造ゐ今の世の人心我ふ用心ゐふ似て忌む者もあるん疑ひもせん。その弐をゐゐるゆゑと諭しく衣裳と更めて、出く迎接の士卒と労し那意ふ任して、招て来し馬と牽しきまで乗る程ふ代四郎若黨騎兵ども准備ゐ果て奴隷の毎ふ親

兵衛の柵笠と紀裏と駝して。相従ふて西陣を。改元の郎ふ来よければ。親兵衛は門前を。馬と駐め降立て引れて内ふ找こ入りぬと奥まりて重屏ある儲の宿所ふ伴ふ登時ちくふ隷られる僮僕们凜しく出迎へ躾て坐席へ案内として茶と薦る程ふ両個の小吏前より来りてありけるが親兵衛ふ對面して。姓名と告り程居の速りしと労して在下们へ君命ふより。己宿所の預りふいへば何まれ欲しゆとあるべき羨りのいむ。己伴當はいろふぞやと問れて親兵衛然ンは他们は猶舊のごく市店ふ別れ在まく欲せ要ふ己者毎ふいへば返し遣せべうゆやとのふふ小吏共ふ異議もなくその弐も隊下知ありて。旅宿は這里まれ那里まれ伴當们の隨意せよと命せられていへば便宜ふ任せゆとふ。それふよりて親兵衛は獨代四郎を召登して。件のよりと告示ふ代四郎は隊より有恁るべしとは知りながら快らぞ思ふゆ。却在るべ己ふあらぬれば羨りぬと應々。退そ若黨黙兵们と共侶ふ二條ふ飯店へ還りけり。然べ件の小吏共は日毎ふ来て親兵衛と慇懃ふ訪ひ慰めく。寡君ふ目ふ懸るべ己ふ。觀音寺の城御征伐の軍議ふよりて。

いまゞその暇あらぞ。その故ふ香西復六も俱ふ勤ちひへ疎闊ふてひりあ何まれ欲しゆふ東西あらぬ羨りのいむ。介意ふく仰ぎられよ。とのゆ詞敵ふ対べもあるねば程もなく身と起して其頭とうち撿西りて。隷僕の心忌れると。謀々ちく詈徴くして。孰の程ふ出て西くりて。親兵衛は憶ぞも這里ふ歇宿と穏ちーより。那客店ふ似るべくもあらぬ三飡の儲へ居ちて茶ふ盧仝が七碗と薦て足りとせぞ。酒ふ醉中の八仙も知ざると昔とせるる日毎の歓待ふ堪ぬ閑るも反て改元の意衷の好ふ料り知るべ己より。犬江がちろ倒ふ欝彫々として。樂まぞ那燕丹が山鴉頭ふ白くなるぞとも。我選る己時も日も豈ちらんやと旦暮ふ祈るめるる慰難く。單徒然ふ堪ざりけり。介程ふ代四郎は自餘の伴當と共侶ふ親兵衛を送着て。故の歇店ふ還りしより。只顧那里のゆとのふいりふくと思難て。絶ふ三四日と過して。伴當们ふ談まるやう。犬江主の推量錯へで。今更對面を許されぞとも。我先那里へ赴して。安否と問まく思ふ。然べとそヨ人數ふて。疑れて事の障りふるるむ。咱ふ瀬踏と任しねと。ちろ彼ふ悄語して。その日政元の郎ふ赴して

門子們ふうちに向ひて。唱ぜ。當所ふ召置る。里見の家臣犬江親兵衛の伴當ぺ王の安否を知まく欲しとふ。まをりけと名告ぜ。そが儘找を入らんとせしを門子ら忌ふ推禁めて否。時殿の伴當あもあれ本邸い家法あり。親疎ふ依らぜ木牌を者へ入まく。ぜるとも。決して入れぜ。出まくぜるとも。敢出さぜ。木牌あべとく出ねと詞敬ふく制ぜ。代四郎听い眼を睜りて否。咱名ハ東の行客ぞれべ。御家の法度をのまざる知らぜ。紙を牌あらぜとも。往日親兵衛ふ倶せられて。西三番當門内へ出入ぞける者ふ。あれべ各位も然ぞりの面善ふぞあらむぜらん。然とも猶許しかさて。早く人を走らしとと親兵衛ふ告ぜ。紛れあべうもいぜと。口説くに門子冷笑ひて。鳥滸ぺ我們い當所を守る是要緊の職分ぞるふ。人の與ふ提接ぜ。暇い絶てぞるのみや。已ねくと。暮めて後ぞ。応もせばりしべ代四郎い困ド果て。今ぞ知りぬ。犬江腋子の推量果して違ひべ。他の上ふく。心許なし。いかまもべぞとぞりふ。和田合戦の義秀ぞらねべ。破難はぞの門の掟ふ。得横隠の下ふ立つと。半晌許。只ぞの上い紀二六の倣ぜ事あらんぞるあぞりと。ぞら久く思ひ入てても他い那里ふ歇求めけ。それぞら尚

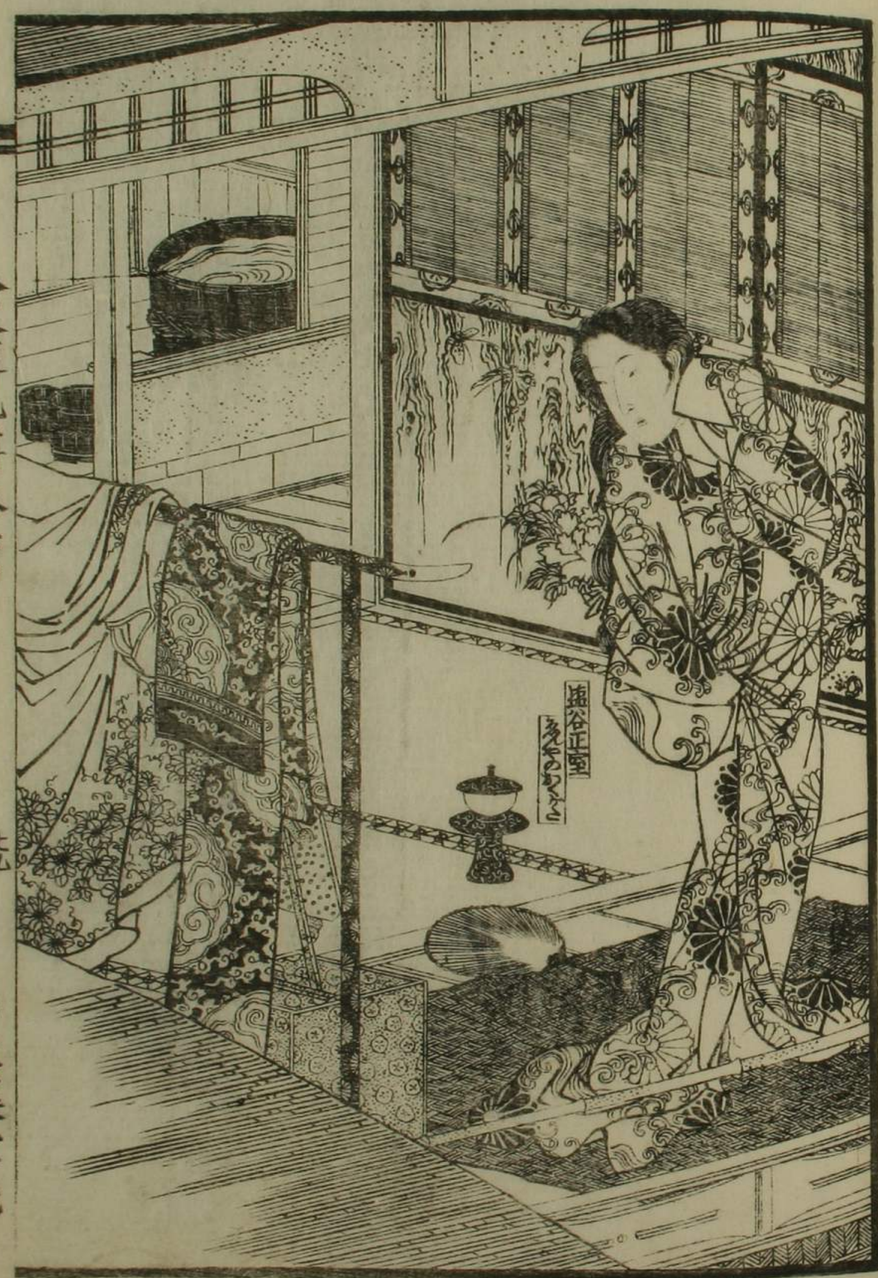
知るよしもぞる。事の不便ふ立つ腹を厭て還ぞ。二條ふ旅歇い路の川障りぞら。托しふ果しるかけ。密下不題直塚紀二六ぞる。鄙ふ照文の教諭ふ従ひ。且親兵衛ふ計を受しぞの宵ぞる。五條頭の客店ふ在り。二三日を経ぬる程ふ准備既ふ整ひ。べ小經紀児の摸樣ふ打扮て。肱嚢を着脚絆を穿ぞ。戸四五寸許ぞる。販樫ふ餡餅を。ぞく。糴貯て。搭駝ひ。躰て。改元の邸ぞる。後門ふ赴ぞく。門子們ふ告ぞる。ぞら。小可い。香西大人の。老僕達ぞる。由縁ぞる。小經紀児でいぞ。今番鎌倉ぞる。移り来つ。いぞでも。邸へ立入りく。糖霜餅子を。賣まく欲ぞ。因て。賜ぞる。木牌ふ。在り。今ぞりして。日毎々々ふ。出入り。仕ぞべれば。目永くぞられまぞらんとぞの。尚ひなるとのひて。遽しく。懷ぞる。木牌を。出して。門子們の。身邊ふ。ぞら。図ぞる。又遽しく。果子盆ふ。餅を。堆高く。裝登して。旦折乾と。寫しる。一分許の金一裹を。又懷ぞる。食ぞ。出して。悄地ふ。是を。推薦ぞる。ぞ。笑ひふ。欺ぞる。憚りぞる。小可ふ心祝ひふ。ぞと。門子們ぞる。呼て。舎笑ぞる。木牌をぞる。又金を。見て。左右ぞる。食ぞる。ぞ。中ふ老ぞる。一人ぞ。紀二六ぞる。ぞら。向ひて。汝い香西殿の内人ふ由縁ぞりとて。木牌さへ。持るといふして。誰ぞ拒

こそ入れざるべ。然るを是等の人情に宜ふ要る紀支ぐる。枉て姑且預り置く木牌に泄の腰に佩て。賣買を果て退る折出て左れば障りそ。餅に背向りるして門卒ども遮與ねかし。出たね。見ねと尊大しけふ頤で誨る方言。四囲訛に拔けねども脫齒を洩る聲散て柘榴の露秋水。涕の落るを知らぬ當坐の免許よ。紀二六る阿唯々々と応じ。先木牌を受合りつ腰に佩て。又遽しく肱を伸して。餅の盆をとり揚て。卸売販樞又肩へ。ぬをう登りつるを揖く。腰を折めつ歩早ふ守屋の背へ赴けり。小程ふ紀二六る計策既ふ成て。門戸の出入自由と。なれば。則あの日と初めて足輕雜色奴隷毎の其隊ふ。まして合居せる大部屋小部屋を。うち巡りて。糖餅を勸賣るふ素より生活の為ぬせざれば殊ふ價と廉くして本を減せども。數ふとるく錢をとる者あり賒をて債りもせざりしば誰ら愛欲ざるむ日毎ふ他が來る屋を。等て買まく思よもヨヌれば。まず一箇月も及ぶぞして。親愛年來出入者る。經紀兒ふ弥増て。ある時ハ晝飯の餘まると。合る出く食せ又ある時ハ茶と煮て薦め買る他が餅を分ち合る。

らるて四表八表の空談ふ。休暇の徒然を慰るも勘りるぞ。そが中ふ一個の走卒の早謡説。經と好るあり。紀二六ふ向ひて。和郎ハ近屬蛮鎌倉より。這地へ徙り來りとハ今那里ぞ。弄嘲も流行曲子と知らるむ。什麼謡ふく吟せぞ。とふを一個の走卒が推禁めく杏々。咱們の曲子より。物の本を好しけれ軍記と見ぞ。珍説ハるぞや何れ語ハるるハ語り。ねが聞まほし。と請れて紀二六頭を搔て。否。小可ハ俗骨ぞ。風流の技ふ疎けれ曲子なんども。少もあがえぞ只總角の比よりあく軍記と嗜て寝食と思るまでふあり。今の世ふ行る。太平記ハ幾番も讀るかふ忘れねども。近屬ハ太平記讀と喚做ぞ。乞兒さへあるそれば。蛉げるいわむ。とふふ大家笑局ふ入りて。開ハ奥あるむ。得意の條を讀ねくと促ぞ。件の走卒推禁めぞ。ぞねが我先問ふ。あり。餅師。太平記ふ載られる歌ヨヌれども。洒家ら覚ぞ。和郎詳ふこれを知るぞと。問れて紀二六然ハ那軍記ふ見えるる歌ハ先第二の巻の首ふ津守國香ぞ一歌あり。是より下同巻ふ七歌資朝俊基の辞世の歌。この中ふあり。又五の巻ふ

五歌後醍醐天皇の笠置の御制裁の中に在り又四の巻に十一歌この餘備後三郎高
徳が天莫空勾践云云の五言三句亦この巻にあり又六の巻に五歌七の巻に落頌一歌
又東軍長崎工藤が連歌あり十の巻に四歌十一の巻に一歌十三の巻に三歌十四の巻に
落頌一歌十五の巻に四歌十六十七の巻に三歌二十一の巻に新田左中
将の恋の歌あり二十二の巻も一歌二十三二十四の巻に各二歌二十六の巻に四歌楠正行の
辞世の歌後村上天皇の述懐の御制裁この中に在り二十七の巻に三歌二十九の巻に五歌三
十二の巻に三歌三十五の巻に五歌三十六の巻に一歌三十八の巻に二歌三十九の巻に三歌
四十の巻に二歌あり通計八十有二歌然れども他詩句四首と連歌ありと思へども暗記せ
ず漏あらんもいかむとかつは又その歌に曲々に首より聲朗に誦し示せば大家ひとく駭
くまでに且感じ且愛及覆さに人いうちえにより けり却も這漢子の記臆のいと好さよ
然らば孰の巻とも諳誦して性ぜやといへば一個の後生がおろる貌に找し出てなほ

餅師より我も亦太平記を讀て知り及べと艶るに師直が塩谷の妻に懸想して那出浴を
偷見る條を堪られぬ覚てそこむ甚麽ぞやと問れて紀二六然れども那高師直が色を好
く且驕恣る那里へ親に老女房を責威し妬ぶ塩谷高貞の嫡室の浴果る
立姿を偷見る條の文に恁こそありけれ汐ゴロせとらひく高く咳して只今この女房 妻 塩谷が 湯
よりあがりけると見えそ紅梅の色殊るに氷の如くに練貫の小袖のまりくとあるを掻取て濡
髪を四くへ長くかきそるを袖の下に焼きさめる虚焼の煙殻香ふぐるに残りて其人の何處に
在らんと心さびく成れば巫女廟の花に夢の中に残り昭君村の柳に雨の外に疎る心地して
云云と讀程に這部屋の小頭児るべ一羊に五十許の髪斑に白く重東東面皮るに故さ
る白幸の草袴の裾伸るに下短に穿做て涅染の布の外套に大紀る孤花靡あるこちら
披の腰に藤柄の両刀を跨へるに細竹の杖を曳て遽しげに入て来て四下を見かへる聲昔るに
兵毎るごとに鏃を磨ぎ敗吊腿の緒を綴らで戯言に日を銷もとに汐ぎを上様 義尚 をらん



太平記巻の第二十二高師直塩谷高貞の正室の出浴を偷見る處

文溪堂蔵

かゝ観音寺の高頼主と御征伐の風聲あるゆゑ武具足ぞ爭何はせん漫ゆゑそと窘る鶴の一唳喈々くる雀潛る竹牕の簡子の下へ皆退ぞく快樂忽地醒ゆけ然ばその日は徒れども紀二六も伴の毎ゆ漸々ゆ親くゝる隨ゆ密くとゝるゆ秘事洩れて這回政元ぶ伴らく將軍家の台命とて犬江親兵衛を安房へ還さぞ賸伴當と歇宿とゝろて那身一個を這西陣ゝる邸ゆ抑めて久く做れるゆ素是所以あるゝと問で具ゆ知りけり开とゝゆぞと原るゆ曩ゆ結城を追放せゝれ逆正寺の悪住持德用は則是改元の妹母子也父い香西復六なけ初故管領勝元の獨子ゝる改元の生れ時復六ぶ妻初乳ゆ召れて遂ゆ妹母ゆゝり改元と德用は俗ゆ云乳兄弟ゆて當初他ぶ乳名を二六郎と喚做ゝ且改元と同庚ゆて五箇月許の兄ゝれぶ其子二六郎ゆ再乳母とゆ者と隷て母の子舍也浮類ゝる隨ゆ二六郎は主君の後堂の局也公子と同樣ゆ成長ゝる果報あれば稚ゆ時より心驕ゝる人を人とも思ぬ癖ゆ十一歳ゆ及びて旅力衆ゆ拔出て武藝と好と酒と嗜て醉

時ゆ猛く勇ゆゝ主ゝりける勝元も他は必萬夫也當の勇士ゆゝるべけれとゝ最憑く思ひ〻ゝ外ゆ懲もとゝゆ忌憚らぞ己ぶ驕る進止ヨゝるゝの故ゆ同從潘ゝる近習外樣の老黨若黨雜色奴隷婢女炊婦まぞ害怕ゝるもヨゝて悄地ゆ號けて悪少年とゝゆ者ゝりける有徒一程ゆ二六郎ゆ十四ゆゝり春三月の時候主君勝元の公子改元ゆ俱せられて嵐山の花觀ゆ出ける折大堰川の上ゆ憶ゝる時の関白藤原持通公の清涼寺へ詣ゝる御車ゆ撞見なり頂細ゝるゆとゝりて改元伴の毎と鬥諍ゆ逮び改元の伴當ゝる老黨は敵ゝを憚ら士卒制其里と外て公子と諫め路次をつそぐて早く帰館ゆ赴ゝよ獨德用の二六のゝ主親の威勢と負こけんその身の武藝勇力と顕さんと思ひけん踏住の連ゆ找ゝて狼藉ゆ及ぶ程ゆ矢庭ゆ摂家の人々と或は蹴ゝて毆伏せ雜掌二名ゆ疵を負ゝる程ゆ猶且一個の牛飼仕人の殷れて即死ゝりけりゝれも二六郎は外ゆ援の兵ゝるけれぶ平ゆヨ勢ゆ捉龍られ筋力衰へ勢ゝ窮

文奏堂藏

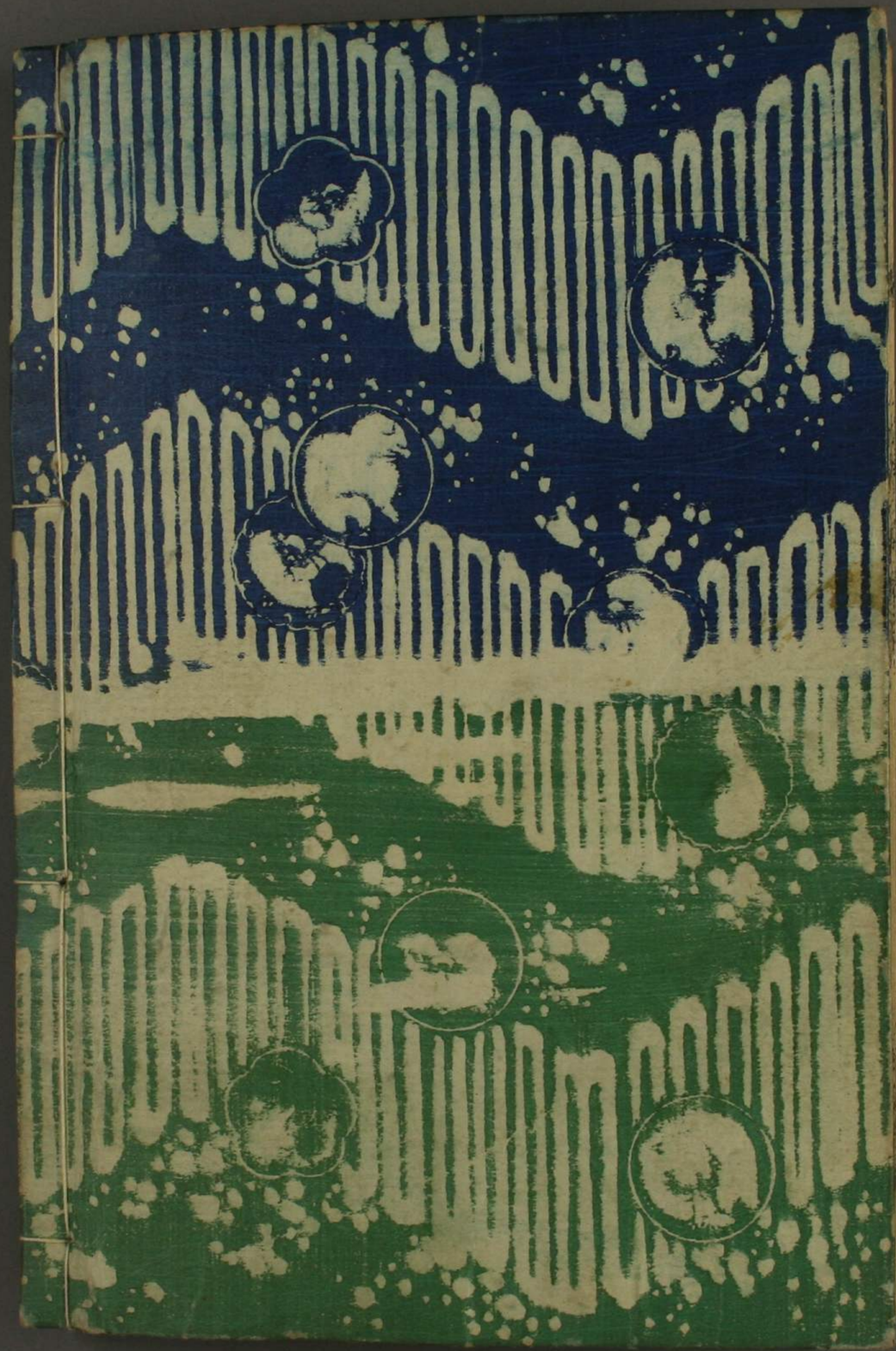
文奏堂藏

アヽその隊より捕られけり。是軽々しき罪なれば赦て武家へ解されて既に死刑は定められ他が父香西復六を勝元の時より召て當家第一の權宰なれば富と勢ひと両ながら主に劣らぬを。その子の與に王の勝元に歎願して悄々地に救ひを求め又其家の金瘡児を殺されるを牛飼舎人の宅養ふヨヽく黄白を餽りて他が死罪を宥められ出家に做して死者の菩提を弔せんと約束をも怨を解きる計策をも程に勝元も亦二六郎が其子改元と乳兄弟の因あるとて愛する心浅からねば室町殿義政に密に愬へて現千金の子に市に棄られを信る内外の幇助にて二六を十五未満の者と宜く出家を遂させて死罪恩免あるべしと公武一揆の裁許をのせ二六を牢を出されて祝髪して度牒を賜り法名を徳用と唤做を。權且父の香華院に在り然れども阿容々々と京師の寺院に在せるべ主親の與に外聞宜まるを且公家に憚りあれども父復六計ひて法縁に就て總る結城の逆足寺へ遣して住持未得の徒弟にをせけり。是よりして復六が徳用が衣料坊料盤纏までも手に毎に餽り遣

を賄ひ医に かゝらしめば徳用は沙弥なる時より師兄をもとより踰て早く役僧に做登りて方外酒茶の友ヨヽかり。有徒に程に故當國の守護結城氏の滅亡とこの年来うち歎く。舊臣殘黨計謀を旋らし心仁の乱を離れ時を待て先君氏朝の子なる成朝を擁立て復城を據り地を略し再興の功成りしかば室町殿義政へ告まうして免許を請まく欲するに逆足寺の役僧徳用は京都の管領勝元の家の權宰なる香西復六時長が愛子を勝元の嫡子改元と乳兄弟の因ありとて八犬士番室町殿へまゐらせる使者なる。衆議既に一決して隨即徳用は結城の舊臣一両名相副をして東西ヨヽく齎らして京師に遣はして果して徳用が挺身して室町殿計宮あり。即使成朝君臣の舊罪恩免の御教書と徳用に渡し賜りて其家再興障なく君臣素懐を遂しむ成朝則その賞として逆足寺の寺格を推登し別に徳用に坊料を取せ且金銀ヨヽく與らる其後住持未得が老を告て退院せまく欲し折徳用に寺主なるべ果に為ねども前功によりて羽振宜しければ孝順清白の字なる影西をもて退けて徳用卒に逆足

寺の住持ゐ做りしより以来萬事己ぶ隨ふせざるとなく或ハ武を講し力技を好み行状出家ゑ
相応しからぬ所ありぬれども成朝君臣自餘の檀越も他ぶ前功思ひ易て許と年来と歴る程ゐ
今茲四月中旬、大法師ぶ宿願と果さんとて結城なる喜茄吉の古戦場ゑ先亡追薦の大
念佛を供類して結願ゐ了まる日徳用是を醋く思ひ同悪の衆徒を招聚へ剰結城の
三驕臣長城惣利堅名経稜根生野素頼門を浮ミ出ゑて、大並ゐ七大士と捕捕まく
欲ゐ友て那身ゐ生拘られて破戒の罪免るゐ方なく成朝王の沙汰として才ゐ命を助
けられ彼ぶ徒弟堅削門幾多ゐ免徒と俱ゐ結城と追放せられける這一條ハ既ゐ前回ゐ
具るれぶ看官通て知れるるべし。ゑ程ゐ徳用ハ投て往方ハ舊里なる親より外ゑ侍る時せゐ
憑しく人ゐもなしと思へ同憂相憐む堅削をのゑ伴ふて日ゐ歩ミ夜ゐ宿り辛くして京師ゐ
歩ち親香西復六の宿所ゐ造の對面と請て己ぶ上を報知まるゐでゐ真実のゆゑとゐ元復
六も思ひ入るゐ我子ゐ訪れて訝りぶ躰て閑室ゐ召入れて来意と尋るゐ徳用答ふ

然こゐ児徒寳々ゐ。一個の徒弟さへ伴ひ来て物を思せまるゐその禍の痛る処是一朝ゐ
あるを抑我寺の大檀那結城下總の新判官成朝ハ傲慢短慮の猥将ゐ。そもそも那家再
興の創より乱政非法尠ゐを剰近屬ハ安房の里見ゐ謀ー合して、ひそかに謀反の企ゑ
故ゐ今茲の春より、大と喚做を一個の賣僧の里見方なるぶ結城ゐ来ゐ喜茄吉の古戦場ゐ
草と締び先亡の菩提と唱て百日の念佛を執り行ふ程ゐ里見の士卒二三百名来會して
是を資けその結願の朝より米銭許ヨヲ施行して、貧民と哄誘ー我寺と奪取ゐ
、大を住持ゐ做まく欲る他門ぶ奸詐虎狼心を天知る地知る人も知る世の風聲ゐ隠れな
けれぶ児徒の我ゐ寳ゐ城主ゐ訴へ道理と演て諷諫の詞を盡ゐ。かども成朝惑ふ信
容れぶ越ゐ結城の三忠臣長城堅名根生野と喚做ゐ者俱ゐ主君と諫難て已とゐぶ隊
兵を領て、大並ゐ里見の士卒と捕捕まく欲る程ゐ我寺屬院の法師門さへ法縁ゐ就て
催促せられて共ゐ向ふと守ぶ児ゐ多く驚憂ひて衆徒を制ん為ゐ這堅削も

伴ひて只得後より赶ッ来るを、大道左道の幻術あり。且那里見の士卒の内中ふ大ゝとして氏と做せる七八個の勇士ありて幻術力戰両ゝ人意の表ふ出ーらべ憐むべ一忠臣長城堅名根生野ハ隊兵と共ふ命を殞ー我寺の衆徒勇僧も或ハ殺され或ハ亦生拘られーもヨヌくるふ成朝及家の家臣小山朝重ら尚醒ざいよく、大ゝと尊信ー那大士們を罪るそ反て我身と堅削衆徒と破戒を慙の罪人ゝとそ惨酷牢獄ふ殺ぜーかども豆義ふ那家再興ふ舊功あれば殺ーもゐなぎ法衣を剥奪り笠を中て竟ふ追放せられる昔法然及親ふ鳥日蓮の三名僧も弘法の為ふ罪るら必罪人ふるらゆ一ーと或ハ白刃の下ふ命危く或ハ配所の起居ひ艱苦を凌ぎ忍ひても誠を照せ天津日の光と俱ふ尼解て末世の祖師と仰宗ら。今の我身も似ーたゝと詞巧ふ非と飾り良将名僧智男の賢士と誣言涯りみるらけり畢竟德用ゲ譏懇ゐられて後の話説甚麽ぞや。汗ハ又復下の回ふ解分ると聽ねかー。

南總里見八犬傳第九輯 巻之二十四 終